

2月5日は「マルディグラ」。脂の火曜日と呼ばれるこの日、カーニバルの喧騒は最高潮に達します。翌日の「灰の水曜日」から復活祭までの間、人々は主の苦しみを実感するために粗食を続けました。その「灰の水曜日」の前日、大掛かりなご馳走を食べ、40日間の精進日を過ごすための体力をつけたそうです。実はこの行事、キリスト教の教会暦にはない民間習俗的なお祭なのです。起源はゲルマン時代の春祭りの要素がたくさん含まれているお祭なのです。カーニバルの欧州での本場(?)ドイツではカーニバルのことを「ファストナハト」または「ファスナット」と呼んでいます。これはドイツ語の「浮かれて騒ぐ」「ばかげた振る舞いをする」という意味の動詞の派生語なのだそうです。欧州でカーニバルを一番初めに始めるのはドイツの「愚者組合」「馬鹿連」などと呼ばれているシュヴァーベン地方の組織の人たちです。彼らは何と1月6日に皮鞭を鳴らしながら「カーニバルがやってくるぞ」と町や村にふれまわります。すると人々はこの日を春の始まりとして冗談を言い合ったり、馬鹿げた衣装を身に付けたりします。そしてカーニバルが終わると本格的な春を迎えることができると思っています。このカーニバル、既に9世紀にはこの習慣があったと記録されているそうです。欧州の歴史を感じることができますね。

ベルギーで生活しているとどうしても欧州の歴史が目に入ってきます。石造りのお城や要塞、身近にある石置や彫刻など本当に歴史的な建造物が身近にあります。特に石で作られたものは長い歴史に耐えて存在していることを感じる重みがありますね。しかし徐々に日本に帰った今年の年初め、京都と奈良を数十年ぶりに訪れて大いに感じるがありました。それは木造の建築物や彫刻が主になっている日本の伝統的な物造りの懐の深さでした。京都の繁華街の近くに錦小路という商店街があります。錦市場としての方が有名かもしれませんが(この通りの名前の由来は非常に無粋なものなので改めて説明する必要がないかと思います)。その商店街に下駄屋さんがありました。そこで男物の下駄を一つ買い求めたのですが、下駄の種類を選び鼻緒を選んでから下駄屋さんは下駄に鼻緒を通してくれました。昔ながらの紐で鼻緒を下駄にくくりつける作業は手作業です。今履いている靴のサイズやどのような体格かを確認しながら鼻緒を調節して作業を進めていました。お話を聞けば「昔からそうしているので今もそうしているだけ」とのこと。昔と同じことを繰り返すのが難しい現代でも、物に拘る職人さんたちは自分たちの技術を大切にされているのだと思いました。お店を後にするとき「下駄の歯が傷んだり鼻緒が傷んだりしたらいつでも持ってきてな、すぐに修理するよってに」と声をかけられました。これが京都の商いなのです。精魂込めて物を作り、それをお客さんへ売った後も決して売りっぱなしにせず、後々まで面倒を見る心がいまだに残っているのです。また私にとって物造りの究極は京都東山区にある国宝の「三十三間堂」です。このお寺は後鳥羽上皇が1256年に再建した1001体の観音様を祭るお堂です。そのうち164体の観音様は平安時代に作られたそうです。お堂自体も国宝、そして観音像も国宝。それに有名な「雷神風神の象」も国宝。三十三の間にはインドから伝わった仏さんの像がありますが、これもすべて国宝。この国宝のお堂は東に面し約129メートルもある直線美のお堂です。そしてその直線は今もいささかも狂っていません。数々の地震や台風などの異変にも700年を超えて耐えてきたお堂なのです。柱一本も700年の歴史を持っています。そっと両手で包み込もうとすると、手の平に700年の重みを感じるようなお堂なのです。その建築の美しさだけでも素晴らしい宝物なのですが、その姿を今も残しているわけも素晴らしいものがあります。それは日本人の持っている「自然には逆らわない」という考え方があったからだそうです。現代の建築技術はまず地盤を固めてから建物を建てます。しかし三十三間堂はわざわざ地盤を不安定、いや動くようにしています。動かないように地盤を固めてしまうと何百年という長い歳月の間には必ず陥没が起こったりします。そこでこのお堂は地面を粘土や砂利などの弾力性のある土壌で固めています。地震が起きたとき、地面は直接に波動を伝えます、しかし地震の波と言うのは水の波と同じように土の粒子の上下左右の回転運動によって伝わるものなのです。つまり土壌に弾力性を持たせておけば、地震エネルギーが放散された後、土の粒子が元の静止した場所に帰ることになります。と言うことは地盤が地震前の状態の復元されるというこ

とです。この地盤に水に浮を並べるように柱を乗せる礎石をそれぞれ独立させて固定し、柱は地面近くでゆるく横木と連結され、エネルギーを分散させながら上部で固定させる。つまり波に浮かぶ筏のよう波が静まれば平面に静止するように作られています。このような構造で作られているので今でもまっすぐな回廊が残っているのだそうです。このような自然と調和し、決して人間のエゴだけを考えず、しかも建築物としての美しさを備えた木造建築物に、先人たちの知恵と心を感じ、感動してしまいました。

先月号で紹介しました奈良の東大寺にも足を運びました。こちら数十年ぶりに訪問。春日大社から若草山を越え、二月堂、三月堂をこえた辺りから大仏殿の巨大な屋根が目に入ってきます。この大仏殿、現存のものは1709年に落慶したそうですが、その大きさに思わず足を止めてしまいました。正面の幅57.5メートル、奥行き50.5メートル、そして棟までの高さ49.1メートルの木造建築物です。何しろ15メートルの大仏さんを納める建物ですから、大仏さんよりもはるかに大きな建物でなければなりません。この大仏さん、銅製で最初に作られたのは746～749年。頭部は江戸時代に、そして体部の大部分は鎌倉から室町時代に補修されたものだそうです。しかしその時代に、石や木を彫って作るのではなく銅で大仏を鑄造する技術があったことに驚きを感じ、そしてそれを現代まで守り抜いているお寺にも頭が下がる思いでした。

京都奈良を回り先人たちの持っていた物造りの技術の高さに感心することがたくさんありました。そして今も日本は物造りの国だと思います。お金でお金を生むことよりも、日本人は創意工夫をしながら物を作ることが得意なのではと思います。伝統工芸品から現在の車や家電機器など、使い手のことを考えそしてより優れたものを作ろうとする姿勢は世界に誇れるものだと思います。

年明けの株価は東京で800円、大阪では1000円を超える値下がりから始まりました。私は専門家ではありませんが、株価の値下がり不況感をより一層強めることになるかと思いました。しかし実際に自分で街を歩き、その活気に触れ、日本人の生活ぶりを目にしてみると、日本もまだまだ大丈夫だと思いました。

《つづく》